

ら は た 探訪 歴史 倶楽部 其の80

TAHARA History Inquiry Club

潮騒の伊良湖岬 8

〜松尾芭蕉の来訪〜

松尾芭蕉といえば、誰もが知っている俳人で、後世には俳聖と称えられた人物です。そんな芭蕉が渥美半島を訪れたことは、ご承知の方も多いと思います。では、なぜ芭蕉はこの地を訪れたのでしょうか。そこには一人の人物の存在が大きく影響しています。

芭蕉の来訪は、貞享4年（1687年）です。このことは、旅行記『卯辰紀行』の中で詳しく記されています。10月25日に越人を伴い江戸を出

発した芭蕉は、東海道を西へ向かい、故郷である伊賀上野や大和路などを目的地とする旅に出かけます。

11月4日に鳴海に到着し、8日には熱田へ、そして、9日の夜再び鳴海に戻った芭蕉は、尾張の門人たちと数日間を過ごす中で、愛弟子・杜国が当時「法度であった空米売買の罪で尾張国を追放となり、隣国である三河国保美の里へ隠棲中であることを知ったのです。そこで、10日の朝には、越人とともに馬で東海道をわざわざ引き返し、杜国訪問の旅に出かけたのです。その夜は吉田（豊橋）宿に一泊し、翌11日には、天津暇・田原・江比間・貞福江）を通って、夕方保美に到着、杜国と再会を果たし、旧交を温めました。芭蕉たちは、数日間この地に滞在し、翌春の杜国との再会を約して帰路につき、16日には再び鳴海に戻っています。このとき芭蕉は、半島内で数々の句を残しています。

冬の日や（すくみ行くや）馬上に
氷る影法師（天津暇）
雪や砂馬より落ちそよ（酒の酔

〔宇津江坂〕

また、保美にて三人が連句を詠んだ「師弟三吟の句」があります。麦生えてよき隠れ家や畠村（芭蕉）

冬をさかりに椿咲くなり（越人）
昼の空蚤かむ犬のねがへりて（杜国）
この他にも芭蕉には、

梅つばき早咲ほめむ保美の里
さればこそあれたきままの霜の宿
の句がありますが、中でも芭蕉が越人と杜国を伴って伊良湖を旅したときのことは、より詳細に『卯辰紀行』の中に記されています。

「保美村より伊良湖崎へ一里ばかりもあるべし。三河の国の地続きにて、伊勢とは海へだてたる所なれども、いかなる故にか『万葉集』には伊勢の名所の内を選び入れられたり。この洲崎にて暮石を拾ふ。世に伊良湖白と言ふとかや。骨山といふは鷹を打つ処なり。南の海のはてにて、鷹のはじめて渡る所といへり、伊良湖鷹など歌にも詠めりけりと思へば、なほあはれなる折ふし。」に続き、鷹ひとつみつつけてうれしいらと詠んだのです。今でも伊良湖は、秋の鷹の渡りで有名です

が、芭蕉が敬愛した、かの西行法師も伊良湖で鷹の歌を詠んでいます。しかしながら、芭蕉が訪れたのは冬で、通常鷹の渡りが見られる季節ではありません。はたして、本当に鷹を見たの

か： その時芭蕉が見たのはハヤブサではないかともいわれ、あるいは杜国を鷹になぞらえたという見方もあります。

現在、伊良湖シーサイドゴルフ場入口にある「芭蕉翁之碑」は、寛政元年（1789年）の杜国没後百年忌に龜山村の井本免孔・為蝶兄弟や畠村の原子蔵らによって追善俳諧が開かれた4年後の寛政5年に、伊良湖旧里の雄岩の上に建立されたもので、その側面には、「鷹ひとつ…」の句が刻まれています。

なお、昭和58年3月には、句碑の隣接地が芭蕉園地として整備されています。皆さんも一度訪れてみてはいかがでしょうか。（天野）

田原市博物館 22局1720



潮音寺境内にある「師弟三吟の墓」と杜国の墓



雄岩上に建つ「芭蕉翁之碑」